

+

2022年

6月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 6月 5日：使徒言行録 2：1-6.

「活かされる出来事」

・ 6月12日：ルカ福音書 12：8-12.

「三位一体の神」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

天を創造し、これを延べ、地とそこから生ずるものを広げ、その上に住む民に息を与え、その中を歩む者に霊を授けられる方、主であ
神……… — 聖書協会共同訳 イザ書 42:5a

イザヤ書に記されたこの文言は、神の真実を語るうえでとても素朴で
すっきりした表現だといえます。どこかに定型があって、古代、誰もが口
にしていた言い回しだったのかもしれませんが。キリスト教会の信仰告白
にも代用できそうです。

復活節の次には聖霊降臨節が始まります。もし、神キリストが天に帰
られて、そのまま何事も起こらなかったならば、聖書のストーリーは頓
挫したまま、その続きは書き記されることはなかったでありません。
教会の原形となるはずの集會も、程無く自然消滅に追い込まれていたで
ありません。

イエスが天に昇られた後の10日間、一体いつまで、どう過ごしてよ
いのか弟子たちには、これといった指示は与えられていなかったの
でした。

しかしその後、事態は急変します、「突然、激しい風が吹いてくるよう
な音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のよう
な舌が分かれ分かれに現われ、一人一人の上にとどまった。すると、一同
は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、他の国々の言葉で、話した
」のです。「炎のような舌」までの記述を、神話的な映像であると
評する者がいたとしても、その続きはどうでしょう？ 弟子たちが、それ
ぞれ別々の言語で話しはじめたのは、きわめて不思議な音声だったとい
えます。その後の記述を読むと、最大、12カ国ほどの言語が、その場に
溢れていたようです。神の霊は、弟子たちに多くの言語を語らせること
を実現しました。

ところが一度、神の約束の聖霊降臨により成し遂げられた神の言葉の
「多言語化」が、キリスト教会の歴史の中で再び花開くまでには、気の
遠くなるほどの時間を要してしまいます。

復活のイエスが弟子たちに与えた最後の命令は、「あなたがたは行っ
て、全ての民をわたしの(イエス・キリストの)弟子にする」ことでした。
これを実現するためには、多言語を用いることは不可欠だったのです。

つまり、イエスが弟子たちに命じた世界宣教とは、天地の造り主である神と、その独り子である御自身イエス・キリスト、さらに聖霊なる神の三位が一体であるという神の真実を人間が知り、これを受け入れることからはじまるのです。

天地の造り主である神が御子イエスにおいて御自身を可視化され、さらに聖霊をも賜ることによって、これを弁護者として立ててくださることを信じる時に、わたしたちは聖なる公同の教会を、聖徒の交わりを、罪の赦しを、体の甦りを、永遠の命を信じるのが可能になるのです。

すべては、神のご計画によるものでした。これを無条件に受け入れる者こそ、自分が神の被造物であることを認め、証する者となります。

このように、神の御計画の順番を、そのままなぞる形で、教会の信仰告白も形成されました。

ただ、これらの教えが、実際に世界中に広まるためには、世界中の言葉が必要となります。そのためには、聖霊降臨の思想である宣教の多言語化がどうしても必要となるのです。

これは、後のカトリック教会が特定の言語に固執し写本や聖礼典に用いる言語をラテン語のみに限定したこととは、真逆の発想です。

それでも、宗教改革に先立ち、聖書の言葉は様々な言語に翻訳され、これらを用いて密かに礼拝が守られるようになりますが、こうした分派活動はカトリック教会による取締の対象となり、違反者は異端宣告を受け処刑されました。

南仏に展開していたカタリ派の分派のアルビ派には、十字軍が仕向けられ、悉く征伐されてしまいます(1209~1229)。

16世紀の前半に、カトリック教会の度重なる暴挙を批判した修道士のM.ルターは、異端宣告を受けた後にドイツ語訳聖書を刊行し、宗教改革を断行します。こうしてカトリック教会が千年以上もの間封印し続けてきた神の言葉は、誰の目にも触れる機会を得ます。キリストが弟子たちに命じ、聖霊降臨によって、一度は多言語化されていた神の言葉が、漸く日の目を見ることになるのです。その後、ルターに習い聖書の言葉は多くの国々の言葉に翻訳され、今日に至っています。

今では、プロテスタント教会に負けず、カトリック教会も率先して、旧新約聖書の様々な言語への翻訳に力を入れ、また多くの国々で、両派が協力をして共通の聖書(共同訳聖書)を刊行しています。このように、両派が対立を克服するのも、イエスが命じた世界宣教には欠かせません。